

神池寺澄ますの池（春日町・市島町）

「和尚（おしょう）さま、小僧がまたいなくなりました。」

「なに、また姿を消した！うーん、これはどうも変だ。」

夕方、鐘（かね）をつきに行った小僧がそのまま行方不明になったのは、これで三人目になります。はじめは、修行がつらくて逃げだしたのだろうと思っていたのですが、和尚さんも考えこんでしまいました。

和尚さんは、その次の日から信用できるお坊さんに、夕方鐘つきに出る小僧を、そっとかげから見はらせました。

三日、五日、七日、何事もおこりませんでした。ところが、ちょうど十日目。その日は、三人目の小僧さんが姿を消した夕方と同じように、空はあつい雲におおわれて、いつもよりずっと早く日が、くれかかりました。

「ゴォーン、ゴォーン…。」鐘の音は、黒々とした杉木立にすいこまれていきます。

とつぜん、鐘つき堂のすぐそばにある池が、波立ちはじめました。池のまわりの草や、雑木がざわつきはじめたと思うと、池の中から大蛇が姿をあらわしました。見はっていた坊さんは、体がガタガタふるえて、声を出すことも、動くこともできません。大蛇は、小僧さんをひとのみにすると、池の中へ姿を消してしまいました。しばらく波立っていた池の水もしずまりました。ほんとうに「あっ」と、いう間のできごとでした。

見はりの坊さんからこの話を聞いた和尚さんは、寺のおもだった坊さんと、いろいろ相談しましたが、とても、普通の方法ではその大蛇を退治することはできないと考えました。

そこで、小僧さんとそっくりな人形をつくり、その体の中に猛毒（もうどく）をしかけました。

この前の時のように、今にも雨がふり出しそうな日を選んで、鐘つき堂へその人形を運びました。

そして、鐘つき堂から、はるかはなれた木のかげから、縄をのぼして鐘がつけるようにしました。

いよいよ、夕方、いつも鐘をつく時こくになりました。

「ゴォーン、ゴォーン、ゴォーン…。」

鐘の音が、いつもより少しゆっくり、ぶ気味にひびきわたりました。

坊さんたちは、木のかげに身をひそめて、口の中で一心にお経（きょう）をとなえていました。

今までしずかだった杉木立が、ゴォーッと風になりはじめ、池の水が大きく波立ったと思うと、大蛇が姿をあらわし、「あっ」

という間に、人形のみこんで池の中へ姿を消しました。

しばらくすると、池が大きく波立ち、うずをまきはじめました。池の中をのたうちまわる大蛇の姿が見えました。風がまたゴォーッとふきあれました。

やがて、池の水はしずまり、風もやみました。みんなが、おそろおそろ池に近づいて見ますと、池の水は、血で赤くにござっておりました。



大蛇はそれきり姿を見せなくなりました。しかし、それまで、深い池の底まで見えるくらい、すきとおった美しい水をたたえていたこの池は、それ以後、何年たっても、赤茶色ににござったままで、もとの澄んだ水にはなりませんでした。

その昔、お堂三十余、坊舎百余、僧七〇〇人がいたというこの神池寺も、今は、すっかりさびれています。

池は、その後、まわりをうめたてられ、小さくなっていますが、大蛇が姿を消したその池は、昔のままの、にごり水をたたえ「澄ますの池」とよばれています。